

一志郡三雲村・貝塚遺跡

1977. 3

三重県教育委員会

一志郡三雲村・貝塚遺跡

I 前　　言

貝塚遺跡は、米の庄小学校のすぐ南に位置し、現況は水田と畑地の、県遺跡番号1800の弥生時代遺跡として記載されている。

昭和51年度県営圃場整備事業三雲南部地区の対象地となったため、昭和51年6月、事業計画地内の分布調査が県文化財調査員の田中喜久雄氏（美里村高宮小学校教諭）によってなされた。

その結果、当遺跡のほかに隣接する若子遺跡および路曾遺跡（いずれも県遺跡台帳記載ずみ遺跡）の3遺跡と、大行寺跡が計画地区内に含まれているため、それらの取り扱いについて県農林部および津耕地事務所と協議したところ、遺跡の範囲、遺構の有無確認の試掘調査を7月28日、29日の両日、 $2\text{ m} \times 4\text{ m}$ のグリッドを14か所設定し実施した。

これにより路曾遺跡にある部分は、削平予定地であるが、遺物・遺構が殆んどなく、遺構面が深いため工事によって現状がそこなわれないであろうということ、貝塚・若子両遺跡の部分は畠よせによる現状保存とし、貝塚遺跡の部分で排水路となる箇所を本調査することになった。

本調査は、12月10日から15日の6日間、地元土地改良区、津耕地事務所、工事請負会社の協力を得て無事終了した。ここに記して謝意を表したい。



第1図 遺跡遠影（南西上空より）

(写真は津耕地事務所の提供)

II 位 置

当遺跡は、雲出川、櫛田川の2大河川にはさまれた伊勢平野のはば中央を流れる中河川の三渡川南岸より1.3km南、海岸より2km西の標高2.5m前後の水田地帯に位置し、行政上は、一志郡三雲村久米字殿垣内地内にある。

この水田面より約0.3mから0.5m程高い、南北90m、東西120mの畠地上にあってすぐ東側を国鉄紀勢本線が走っている。この畠地上の灌漑用溜池の西が若子遺跡（1）、南西90mの畠地が路曾遺跡（2）で近接しており、さらに、これらを含む一帯が三国地誌に記載されている平安時代以降の寺院址といわれる大行寺址（3）となっている。

この周辺の遺跡としては、北方1kmの中の庄遺跡（4）、西方1.5kmの文珠（5）、辻世古中（6）両遺跡、西方1kmの宮の越遺跡（7）、北東1kmの権現角遺跡（8）、東方0.4kmの久米貝塚（9）等がある。

III 遺 構

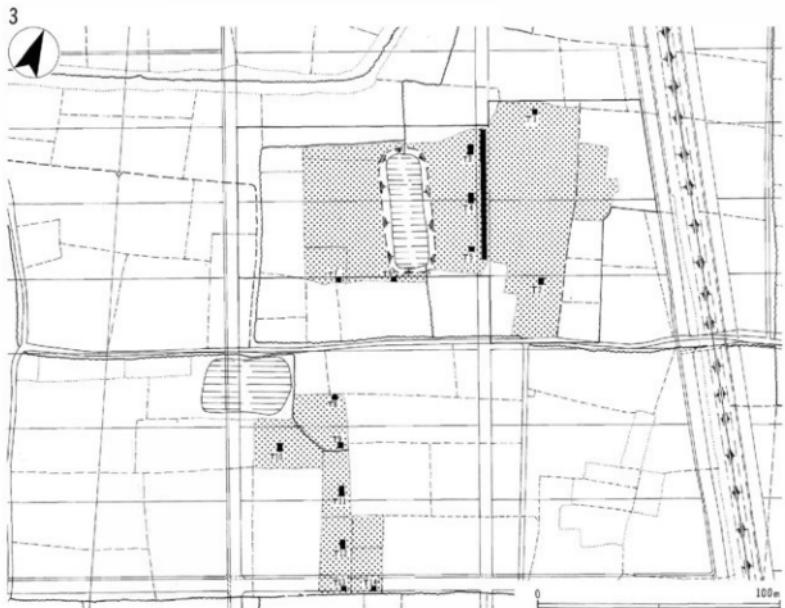
幅2m、長さ54m、面積108m²の排水路部分の調査であったが、多数の土塙、溝、ピット等が検出できた。層序は、耕作土（0.2m～0.3m）、暗褐色土（遺物包含層）、地山となった単純層度であるが、地山は、K1～K6の部分とK12～K14の部分が黄灰褐色粘質土で、K7～K11の部分が黄褐色砂土である。粘質土の厚さは、深いところで約0.4mありその下は青灰色砂土となってい

る。

発掘区の南端で検出された4条の溝は、いずれも地山より約0.15m～0.2mの深さで、約0.3～0.4mの巾をもち、3条がほぼ並行している。これらと発掘区北端の溝の部分とは、ほぼ直交関係をもっている。溝の中より出土した土器は、殆んど小破片であり少量のため時期が不明である。しかし、この部分の遺物包含層から出土した土器片の中に、他の発掘区で出土していない灰釉陶器片、山茶楓片が出土している。

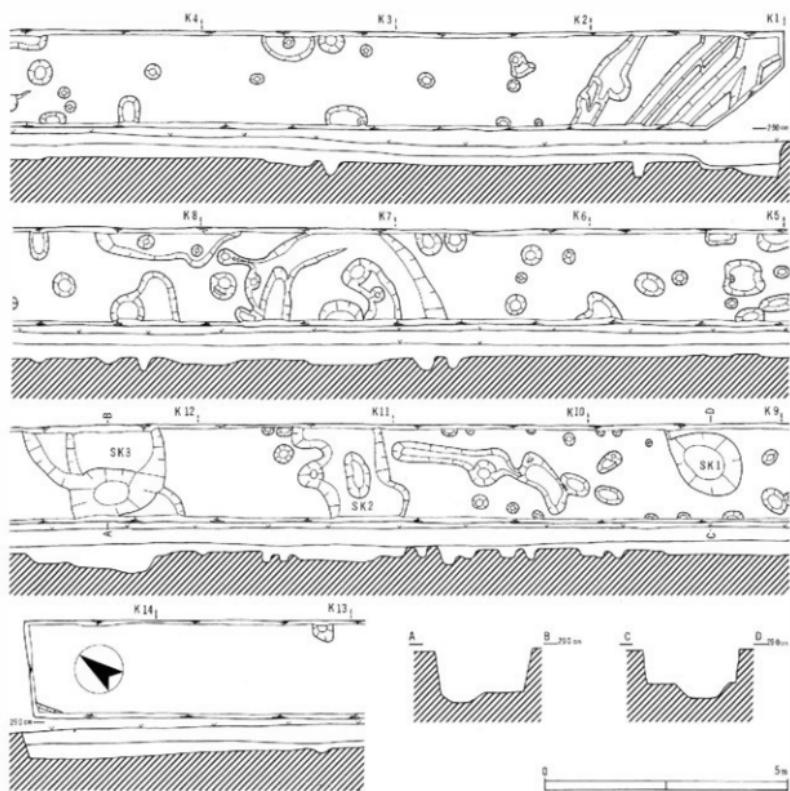
その他、ピット、土塙なども検出されたがそれらの殆んどは、伴出遺物がないか、あっても小破片のため時期は不明である。次に述べる3つの土塙からは完形品を含む土器がまとめて出土しており、弥生時代後期後半頃のものといえる。

S K I K9で検出されたもので、1.3m×1.7mの大きさ、地山面からの深さ0.4mのはば橢円形を呈する。



第2図 1. 位置図(国土地理院1:25000 松阪港、大野)

2. 造跡地形図(1:10000) 3. 発掘区平面図(1:2000) Tは試掘場



第3図 発掘区実測図 (1 : 100)

SK2 K11で検出されたもので、巾約1.5m、深さ0.1m前後の浅い溝状の中に1m×0.5mの大きさ、深さ約0.3mのほぼ橢円形状を呈する。

SK3 K12で検出されたもので、大きさ2.5m×2mの不定形であり、三段に分かれている。一番深いところは約0.6mあってこの全体から土器が多く出土しているが特に中段部分からが多い。

IV 遺 物

出土量は、調査面積が小さい割には多く平箱20箱分である。全体としては、弥生時代後期のものが多く須恵器はわずかで殆んどが小破片である。この他平安時代から鎌倉時代のものと思われる灰釉陶器片、山茶楓片、山皿片、土師器片も出土しているがそれらの殆んどは発掘区南端の包含層からの出土である。

弥生時代後半頃の殆んどは、SK1、SK2、SK3からの出土でまとまっている。

その他、軽石、磨製石剣先端部片、装飾球形土錐が出土している。

1. SK1出土の土器

壺（1） 口縁部が弯曲しながらくの字状に外反し端部を丸くおさめる。内外面とも横方向の撫でを施す。

小型壺（2・3・4） 2は球形の胴部のほぼ中央に最大径があり、外面は縦方向の細かい範磨き、内面は撫でによるが底部近くは放射状の刷毛目を施す。4は平底で内外面に一部刷毛目を残す。3は口縁部外面に4条の横線文を配し内外面とも縦方向のいねいな範磨きを、胴部は刷毛目のあと範磨きを施す。底部はやや凹み底部内面に刷毛目を残す。

壺A（5・6・7・9） 球形の胴部にくの字状に外反する口縁部がつき、端部にせまい面をつくるもの、口縁端部が尖って終わるもの、やや内寄気味につよく外反し端部がやや突出するもの、口縁部がやや弱く二段に屈曲しているものがある。内外面とも斜め方向の刷毛目を施すが、6の外面は胴下方で範削りを、内面も一部範削りを施す。7の胴部外面は刷毛調整のあと撫でている。

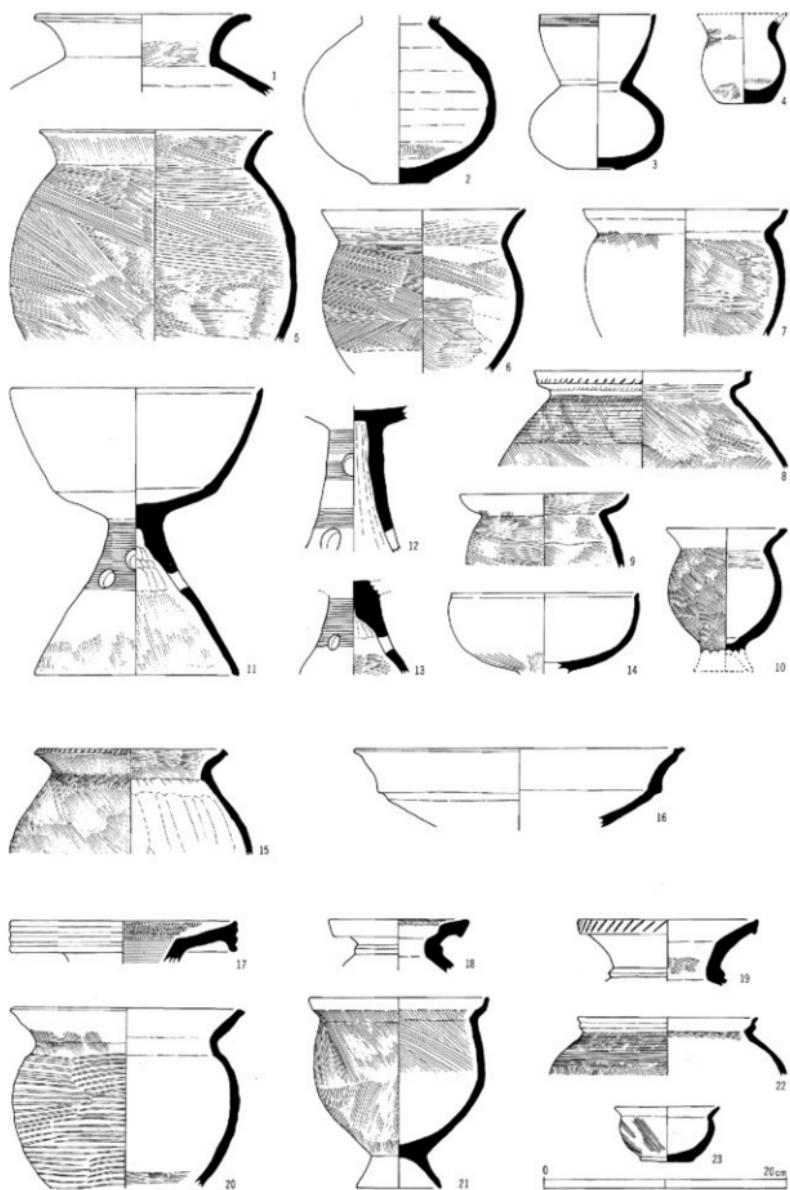
壺B（8） いわゆるS字口縁壺のもので、端部の立ち上りはまっすぐで面をつくる。

小型台付壺（10） クの字状に外反し端部に面をつくる口縁部をもち、外面は細かい刷毛目を、内面頸部に横方向の刷毛目を施す。

高杯A（12） 筒状の脚柱部に横線文を三段にめぐらす。上段1方向、下段3方向の透孔を配し、縦方向の範磨きを施す。内面に絞りあとを残す。

高杯B（11・13） 11は内寄した杯底部より稜をもって内寄気味に立ち上る口縁部をもつ、端部は断面三角形状に尖る。内外面とも刷毛目のあといねいな範磨きを施す。脚柱部に横線文を配し、上段1方向、下段3方向の透孔をもちはば中央より裾部にかけて内寄する。外面は刷毛目のあと範磨きを、内面に刷毛目を施す。

高杯C（14） ほぼ半球状に近い杯部をもち、内外面とも範磨きを施す。杯底部の外面に刷毛目が残り、口縁端部はB類と同様であるが内傾する面は小さい。



第4図 上段SK1出土(1~14) 中段SK2出土(15~16) 下段その他調査地区出土(17~23)
(1:4)

2. SK2出土の土器

甌 (15) くの字状に外反した口縁部をもち端部の面に櫛状工具による刻み目を施す。口縁部から胴部にかけて刷毛目を施し、頸部には刺突文を配す。口縁部内面には横方向の刷毛目を、胴内面は縱方向の撫でを施す。

高杯A (16) 杯底部はやや弯曲し、口縁部へ稜をもって外反する。内外面ともていねいな箒磨きを施す。

3. SK3出土の土器

壺A (24) 口縁端部が垂下してできる巾広い面に横線文、竹管文、棒状浮文を配し、口縁部内上面に羽状文を配す。

壺B (25・26) 口縁部がつよく外反し端部がやや上下に突出し面をつくる。この面に文様を配するものとないもの、頸部にわずかな凸帯を配すものとないものなどがある。

壺C (27・28・29・30) 27・28は口縁部がくの字状に外反し端部で上下にやや突出し頸部にかけて刷毛目を施す。羽状文を配するものもある。29の口縁端部はそのままおさえており、外面に縱方向の箒磨きを施し内面に斜め方向の刷毛目を施すがつなぎの部分は横撫でによる。28は球形の胴部をもち口縁内部に横方向の箒磨きを施し、胴部外面に横斜方向の箒磨きを施す。

壺D (31・32) 口縁端部が上方に突出し浅い受口状を呈し、内外面ともていねいな箒磨きを施す。

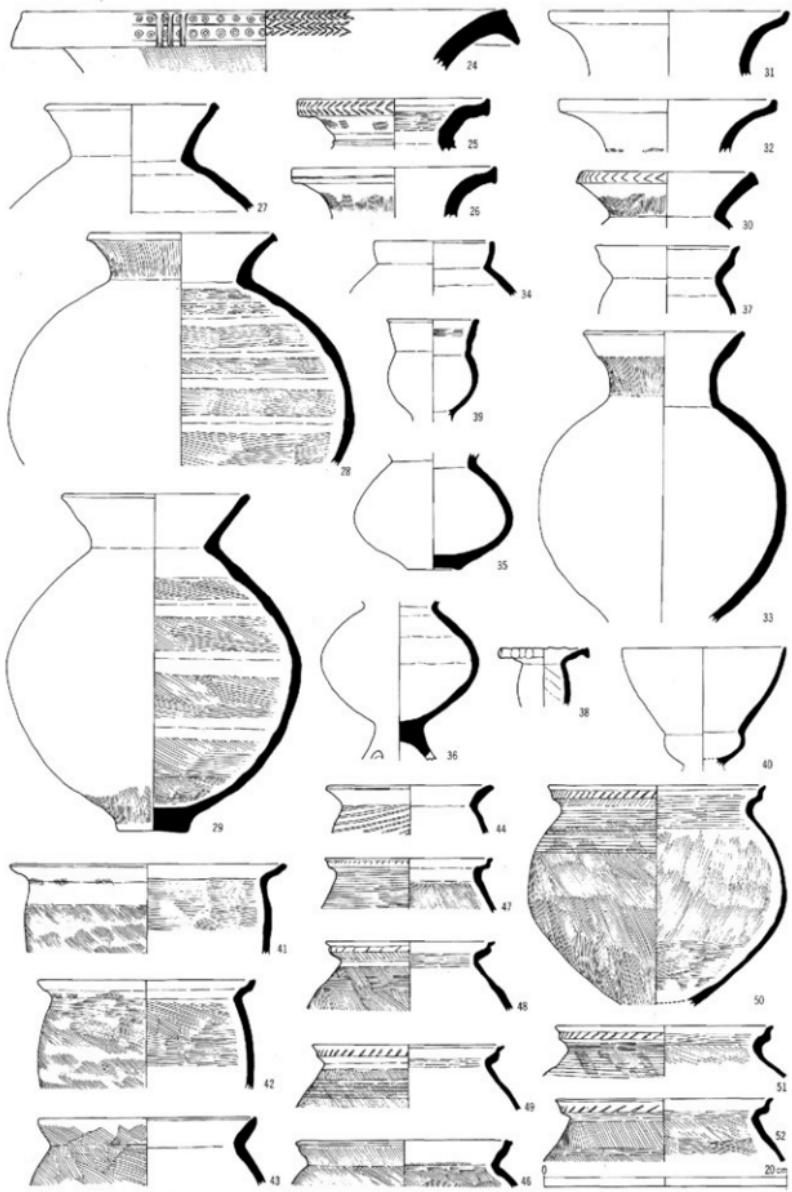
壺E (33) やや長い頸部をもち口縁部がやや内寄気味に八の字状に開く、頸部に縱方向の刷毛目を施し、胴部は斜方向の箒磨き内面は撫でによる。

短頸壺 (34) 口縁部がやや内寄気味に立ち上り内外面ともていねいな箒磨きを施す。

小型壺 (35・36・37・38) 35は瓢壺の胴部分であろう。36は台付長頸壺と思われ、共にていねいな箒磨きを施す。37はゆるやかに屈曲する口縁部が尖っておわる。38は大きく外反する口縁端部に円板状の装飾物を押えこむ、胴部は内寄気味で内外面とも撫でである。

小型台付壺 (39・40) 40は球形状の胴部に内寄して開く長い口縁部がつく、内外面とも縱方向のていねいな箒磨きを施す。39はほばまっすぐに立ち上る口縁部をもち、口縁部内外面は横撫でを、胴部外面に縱方向の箒磨きを施す。

甌A (41・42・43・44・45・46) 41・42はわずかに屈曲して外反する短かい口縁部をもち、内外面とも刷毛目を施す。43はくの字状で単純に外反する口縁部をもち、外面に粗い刷毛目を施す。44は左下りの叩き目を施す。45はくの字状の口縁部の端部に面をつくる。縱長の胴の内外面は細かい刷毛目を施し全面に煤が付着する。



第5図 SK 3出土 (1 : 4)

壺B (47・48・49・50・51・52) S字口縁甕であり口縁端部がやや外方へ突出して面をつく。口縁屈曲部外面に櫛状工具による刺突文を配し、頸部から胴上部にかけて横線文を施すが刷毛目との前後関係は一定でない。頸部内面に刷毛目を残す。

小型鉢 (53) 断面漏斗状を呈し口縁端部は笠状工具による削りがある。内面はやや粗い刷毛目を、外面に細かい刷毛目を施す。

台付鉢 (54) ほぼ球形に近い胴部にわずかに屈曲しながら立ち上る口縁部をもち頸部上下に細かい刷毛目を施す。内窓気味の裾部をもつ脚台部がつくが、脚台部内外面にも細かい刷毛目を施す。

小型有孔鉢 (55・56) 鉢形土器の底部に1孔をうがっているが、56は低い台状の底部をもつ。いずれも内外面に細かく長い刷毛目を施すが、煤の付着は認められない。

高杯A (57) SK1出土のものと同時期と思われる。

高杯B (58・59・60・61・62・63・64・65) 脚柱部がやや筒状を呈するもの、脚部の長いものの、短かいものの、二段3方向の透孔をもつものと形態様々である。杯部もSK1のより杯底部がせまく深いものもある。65は小型壺類の脚台部かもしれない。

高杯D (66・67) 66は筒状の脚柱部に大きく外へ開く裾部をもち、一段5方向の透孔を配す。杯部とのつなぎ部に5条の深い凹線文を配し、縱方向の範磨きを施す。67は全面撫でてあり、筒状の脚柱部から大きく開く裾部をもつが、内部は中空にならない。

器台 (68) 脚部中央より下方へ八の字状に開き端部は段を有しながら尖って終る。一段4方向の透孔を配し、外面に縱方向のていねいな範磨きを、内面は撫である。

土鍤 (69) 三分の一程が欠落しているが球面に櫛状工具による同心円状の刺突文を配す。

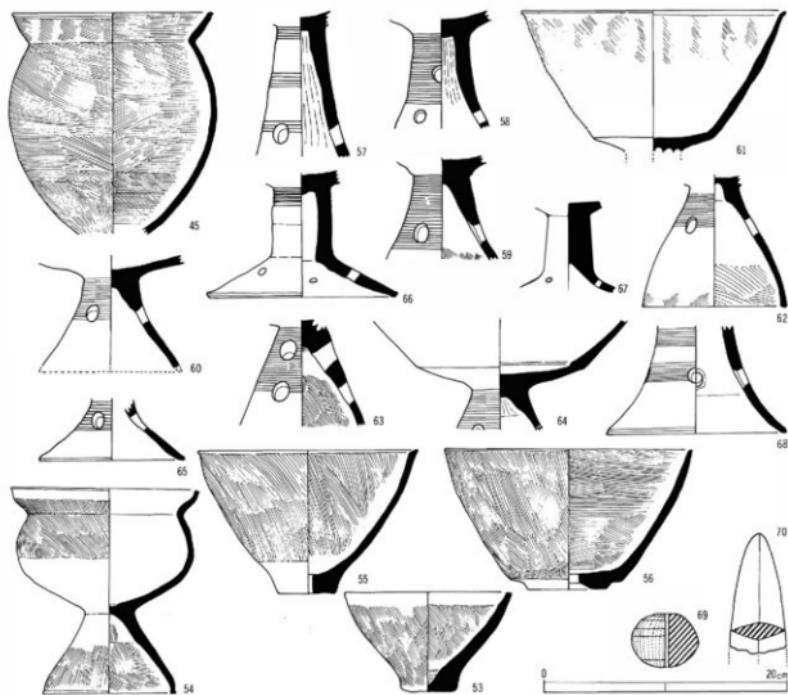
石剣 (70) 断面扁平菱形状を呈し、表裏ともていねいに研磨を施す。

4. その他の調査地区出土の土器

壺B (17・18・19) 17はT-4出土、二段に屈曲し大きく外反する口縁部をもち端部は上下に肥厚し面をつくる。面上に凹線文を配し口縁部内面に羽状文を配す。口縁部内面下方は丹塗りである。18は口縁内部に細かい羽状文を配し頸部に突帯をもつが磨耗が強く調整は不明。18はK-4、19はK-6出土。

壺B (22) 口縁部外面の刺突文はなくなっているが、SK1、SK3出土のS字口縁甕と同じ調整を施す。T-3出土。

壺C (20) T-4出土。球形に近い胴にくの字状に外反する口縁部の端部はおさえによる平坦面をもつ。胴部外面には横方向の叩き目を、内面は撫でているが下部に刷毛目を施す。全面に煤が付着する。



第6図 SK 3出土 (1 : 4) ただし69・70は1 : 2

台付壺 (21) T-4出土、SK 1出土の7.と同じような口縁部をもち、頸部から下方へ刷毛目を施す。内面も刷毛目を施すが胴下半部に斜め方向の箝削りを施す。

鉢 (23) 平底でくの字に外へ開く口縁部をもち端部は尖って終る。撫で仕上げによるが一部に刷毛目を残す。K-6出土。

V 結 語

貝塚遺跡は小面積の発掘調査であり住居址は検出されなかったが、土塙から比較的まとまって出土した土器からみて弥生時代後期頃から最末期に盛行した集落跡の一部であることがうかがわれる。大行寺址の推定地域にも含まれているのであるが歴史時代の遺物を少量伴う小溝がなんらかの関係をもつてはなかろうかというぐらいではっきりしなかった。

出土遺物の中で、S字口縁甕については、大參分類でいう a類、足立・木下分類では I類にあたるものが殆んどであり時期的には欠山期の新しい段階にあたるとされていて脚台の端部は平坦であり折り返しがなく、胴部を底までつくらず別に作った脚台部をとりつけて作っている。

高杯については、寄道期の新しい段階に比定されるものも一部あるが、殆んどは欠山期のものであって、脚柱部に横状工具による横線文を施している。

畿内的な要素を少なからずも土器としては、高杯(66)、甕(20・44・45)、鉢(53)、小型有孔鉢(55・56)などがあげられるが出土量の1割にもみたない。

すでに三重県における弥生時代後期の流れとして北中勢地区で、上箕田一西ヶ広一高松と指摘され、さらに弥生時代後期後半以降の流れとして南勢志摩地区で、中楽山A区 S B 1—中楽山 S X 1—大畑SK 1と指摘されていることから貝塚遺跡は、高松期および中楽山期に比定できる。

さて、次の表Ⅰは、県内で発掘調査された数ある遺跡のなかで弥生時代後期から古墳時代後期の土器がありよく出土している遺跡について、それぞれの報告書を参考にして高杯形土器(T)とS字口縁甕(S・SI～SV)を対象に作成したものである。特にS字口縁甕については、足立・木下分類を用い、時期その他については、大參論文・飯尾論文および遷向報告書を参考にした。

また、表Ⅰには、瓢壺(N)、小型器台(K)、小型丸底壺(M)、小型鉢(H)もあげたが古墳および古窯址出土のものは省いた。

表Ⅱは、高杯とS字口縁甕とが重なる部分をそれぞれの遺跡の盛行時期として作成した。

表Ⅰ、Ⅱは、あくまでも特定の土器についての形態的な比較を中心としたため、他の器種、セット、製作技法などの関係を含めた別の視点からの研究により再考すべき余地を十分に持っていることをことわっておきたい。

現在、県下で生産された須恵器で一番古いとされる久居古窯址出土のものは、5世紀末頃と比定され、これよりも一時期古いとされる神前山古墳出土の須恵器は搬入品であろうという見方がなされていることから、三重県の古式土師器の終末期は、5世紀末頃と考えられる。(表Ⅰの右側の点線)

三重県における古式土師器の初現期はいつ頃かという問題であるが、まず、足立・木下論文において、S字口縁甕Ⅰ類は量的には少いが、近畿から関東地方にかけて分布し、次の典型的なⅢ

時 期	3C	4C	5C	6C		
畿 内	庄 内 式 布 留 式					
S 字 口 縁 壺		S I	S II	S III	S IV	S V
東 海	山 中 期	欠 山 期	无 屋 敷 部	石 塚 期	上 条 期	完 新 初 期
三 重 県			A B	A B	A B	
1 西 ケ 広	T S					
2 永 井	T S			S III S IV		
3 高 岡 青 谷		S I T				
4 上 箕 田	T S					
5 中 薦		T		S III		
6 竹 川	T S	S I N	S II N	S III		
7 辻 の 内		T	S II N	S III	T	S V
8 清 水 西					T S IV S V	M:
9 高 松	T	S I				
10 新 煙					S III S IV K.M.	T S V
11 貝 塚		S I S II N: M				
12 中 楽 山		T S I S II N:				
13 おばたけ		T S II		S III K.H.M.		

表1

表2

山 中 期		欠 山 期	
上 箕 田			
水 井			
(西 ケ 広)			
(高 岡 青 谷)			
竹 川			
(高 松)			
(中 楽 山)			
新 煙			
清 水 西			
貝 塚			
(中 楽 山)			
(おばたけ)			

第7図 表1.2 三重県における弥生時代後期から古墳時代の遺跡の流れ

(昭和52年5月作成)

類には更に広く分布することが指摘されており、纏向報文にある他地域からの土器一覧表においてもⅠ類は1例であるが、Ⅱ類が多く出土していることから、弥生時代後期前半頃その祖形が東海地方に認められておりそれがⅢ類にいたる段階で、口縁端部の外反、櫛状工具による刺突文の消滅と刷毛目の主体化、脚台端部の内側への折り返しの発生という変化と広い地域での分布から考えられる畿内との密なる関係をもつこと。

次に、表Ⅰをみると欠山期に比定される遺跡からは纏向Ⅱ式に位置づけられるような小型器台の出土をみないこと。

そして、古式土師器と弥生式土器との区別が古墳の存否にあるとされるならば、発掘調査された古墳の中で古式土師器が出土した5世紀初期頃に比定される坂本山古墳群と5世紀代に比定される八幡塚古墳などがあげられ、より古い時期の土師器を伴出する資料は今のところみあたらないのであるが、愛知県の池の上1号墳の主体部および封土中から欠山期の土器の出土が報告されていることなどの点から考えると、三重県における古式土師器の初現期としてS字口縁縦彫Ⅲ類の出現する時期の前後頃と考えられる。(表Ⅰの左側の点線)

以上、貝塚遺跡出土の土器について県内の関連遺跡との比較を試みたのであるが、三重県の古式土師器を考える場合、今後、前述してきたことを含めて、瓢壺の初現と期間、小型丸底壺の祖型、小型器台の消滅後それに変わる土器、小型鉢の初現と消滅後それに変わる土器などの問題の検討充実により、より明らかにされてくるであろう。

(伊藤克幸)

註

- ① 大參義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集XLVII』
- ② 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌60の2』において、S字口縁縦彫をⅠ、Ⅱ、ⅢA、ⅢB、ⅣA、ⅣB、ⅤA、ⅤBの8期に分類し、それぞれを位置づけている。
- ③ 谷本銳次「西ヶ広遺跡」5B弥生時代の遺物『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会。
- ④ 下村登良男「中楽山遺跡」『昭47県埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会
- ⑤ 1. 註③に同じ
2. 四日市教育委員会「永井遺跡発掘調査報告」
3. 大場範久・仲見秀雄「鈴鹿市高岡青谷遺跡調査報告」『神戸史談8号』神戸高校郷土史研究クラブ
4. 神戸高校郷土研究クラブ「上箕田弥生式遺跡第一次調査報告」
真田幸成・大場範久・仲見秀雄「上箕田弥生式遺跡第二次調査報告」鈴鹿市教育委員会
5. 蒼室康光「中薦遺跡発掘調査報告」津市教育委員会
6. 谷本銳次「竹川遺跡」「美老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会
7. 伊藤克幸「辻の内遺跡」『昭50県埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会
8. 谷本銳次「清水西遺跡」『昭47県埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会
9. 三重大学歴史研究会原始古代史部会「津市高松弥生遺跡について」『古代学研究37』
10. 吉村利男「新畑遺跡発掘調査報告書」津市教育委員会
11. 本報告書
12. 註④に同じ
13. 下村登良男・村上喜雄「おばたけ遺跡発掘調査報告」鳥羽市教育委員会

- ⑥ 註②に同じ
- ⑦ 註①に同じ
- ⑧ 鈴尾恭之「尾張における後期弥生式土器の編年的研究」『古代人27・28』
- ⑨ 檀原考古学研究所「趣向」
- ⑩ 小玉道明・山沢義貞「久居古窯址群発掘調査報告」久居古窯址群発掘調査団
- ⑪ 下村登良男「神前山1号墳発掘調査報告書」明和町教育委員会
- ⑫ 註①、②に同じ
- ⑬ 丸山竜平「弥生式土器の終焉」『古代研究10』に、このことに関しての見解が記されている。
- ⑭ 津市教育委員会「坂本山古墳群・坂本山中世墓群」
- ⑮ 四日市市教育委員会「八幡塚古墳発掘調査報告」
- ⑯ 久永春男「弥生文化の発展と地域性・東海」『日本の考古学』



遠 景（北より）



S K 1 (南東より)



第8図 S K 3 (南より)



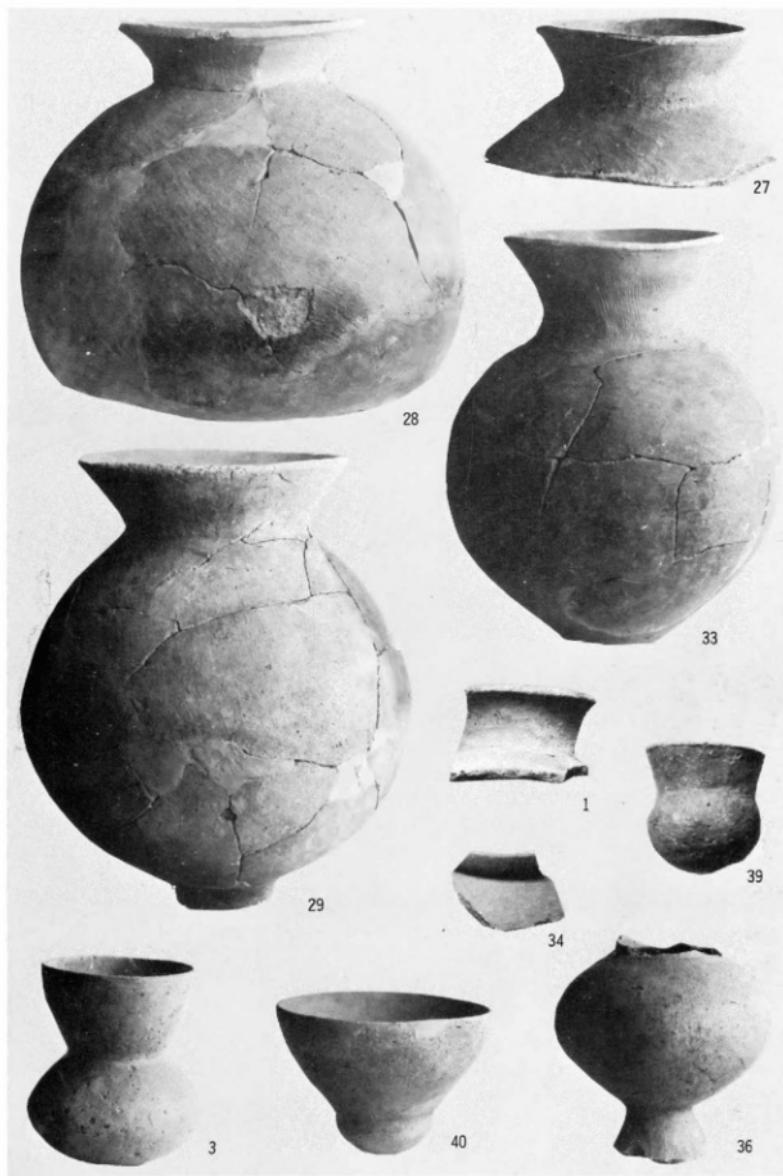
発掘区 K 1 (北西より)



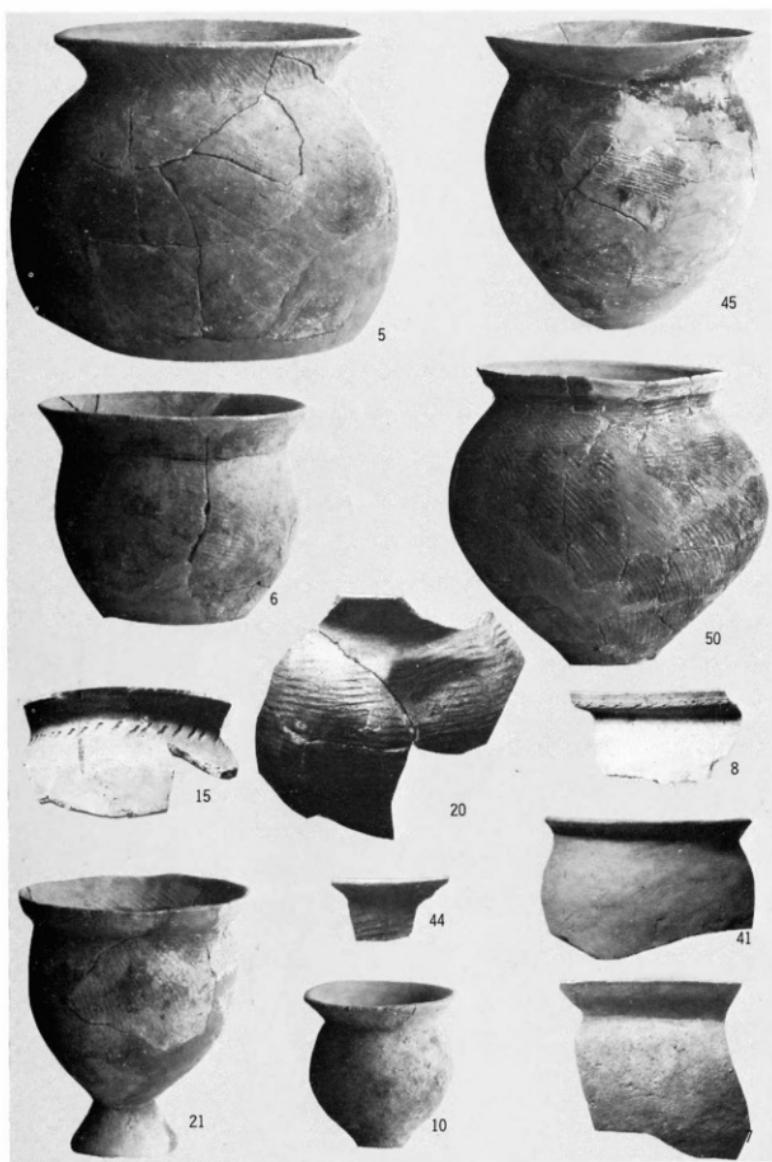
第9図 K 7～K 1 (北西より)



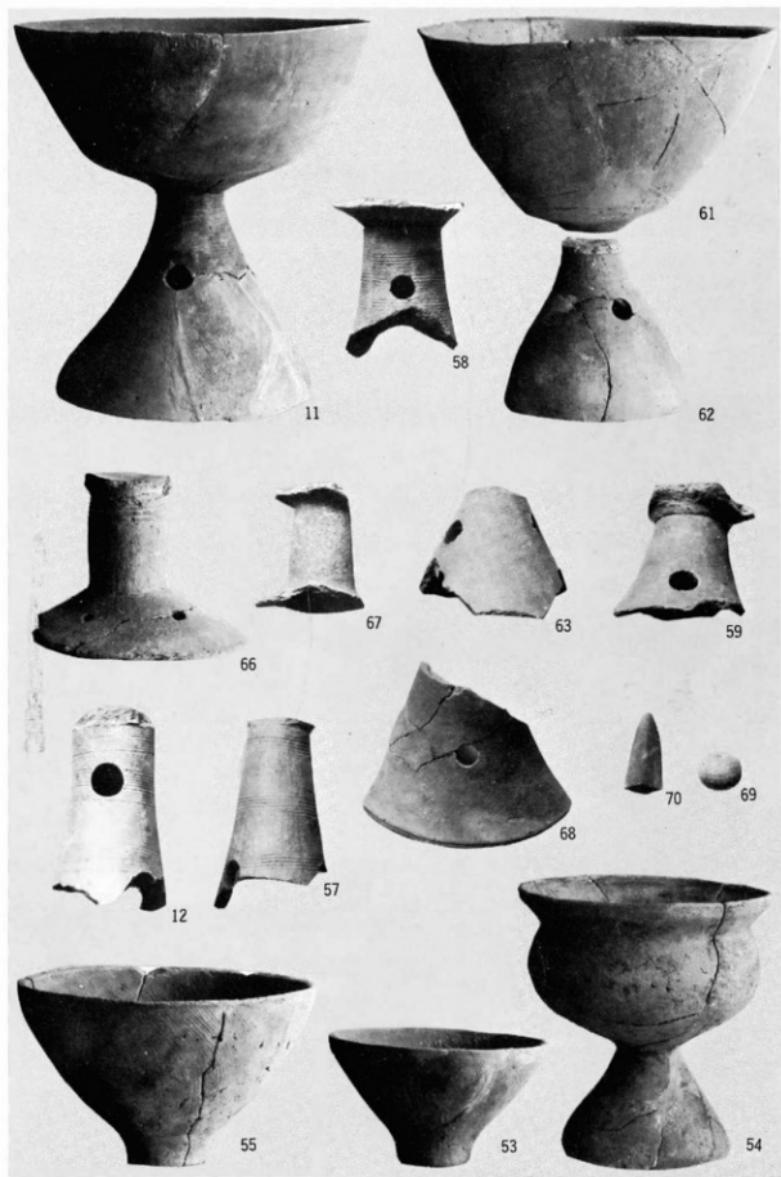
S K 3 (北西より)



第10図 壺 (1 : 3)



第11図 壺 (1 : 3)



第12図 高杯、鉢、その他 (1 : 3)